「さとり」って何？

二月十五日はお釈迦さまが亡くなられた日です。そのお釈迦さまが開かれた仏教は、インド北方の小さな国の王族の青年の思いから始まりました。人間が生まれ・老い・病み・死していくことへの苦悩の解決を目指して城を出て、修行を実践し、ついに三十五歳の時、さとりを開かれたと伝えられています。

では、「さとり」とはどういうことを言うのでしょうか。それは、世界をありのままに正しく見ると、あらゆる存在や現象は関係し合って成り立っていて、これによって、人間の苦悩のありさまを正しく知り、苦のもと(因縁)を見極め、解決された状態を明らかにし、その実践方法を示されました。

さとりを開いて人間の根本的苦悩が解決されるとは、人間がどんな境遇にあっても、安心して尊く生きていくことができ、安心していのちを終えていける、そういう生き方に目覚めるということでしょう。「生きていける」ためには、いつでもどんなときでも安心できる確かな支えと、向かうべき未来が必要です。そのことに出遇い、目覚めることを「さとり」と表現したのだと思います。正岡子規は、「さとりという事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思って居たのは間違いで、さとりという事は、如何なる場合にも平気で生きて居る事であった」と仏教の僧侶に出遇い、教えを受けた後、書いています。

仏説阿弥陀経に「阿耨多羅三藐三菩提」という仏語がありますが、これを「無上の真実なる完全な悟り」といいます。仏教では、さとりといっても、低いものから高いものまで、全部で五十二あります。これを「さとりの五十二位」といい、相撲で言うなら、下は序の口から、上は大関横綱まであるようなものです。そして、その最高のさとりを「仏覚」「阿耨多羅三藐三菩提」と言い、「仏のさとり」です。この「仏のさとり」を開かれた方は、地球上ではお釈迦さまだけなのです。

お釈迦さまは、このさとりに到る道をたくさんの教えによって説かれました。その中で浄土真宗とは、あらゆる者を必ず救うという阿弥陀如来のはたらき(南無阿弥陀仏)によって、浄土に往生してさとりを開く教えです。「南無阿弥陀仏」のお念仏申す日々を送らせていただきましょう。